

八. 今生きている

油の流れをじっと見つめて圭介は本体の脇に立っていた。太いビニールホースから噴出する大量の油は本体下部の油溜まりに激しく落下して、腹の底に響く音をたてた。ホースの先には太い針金でナイロン製の布袋が括り付けてあった。油は今にも布袋を突き破らんばかりの勢いだった。油溜まりの油は地下の配管を通してオイルセラーのタンクへと流れ込んでいた。

地下の配管からタンクのマンホールまでは、噴出口と同じビニールホースでつながれ、ビニールホースの先には本体の脇と同様に布袋が取り付けられてあった。ポンプの運転音と油がタンクに流れ落ちる音とで、オイルセラーの中は騒音地獄であった。

マンホールの脇では、無収縮モルタルの缶に腰を下ろした川村がじっとタンクの中を覗き込んでいた。オイルセラーの入口扉の脇のポンプ操作盤の前に高瀬が立っていた。高瀬は時々、川村や圭介の動作を窺うような素振りを示した。配管屋たちは三々五々、配管を点検して歩いていた。

フラッシングは前日に始まったばかりであった。油が勢いよく走り出し、まずい部分が無いの確認すると安田はライトバンを運転して帰って行った。

「あとは任せるわ。あんたが付いててくれれば、あとは河村君で充分やれるでな」
安田の帰り際の言葉が圭介の耳の底に残った。

安田が帰った後、圭介は一抹の不安を感じると共に、ある種の寂しさを拭い切れないでいた。現地工事は、自分の仕事を完了した者が一人、二人と去っていく段階に近付いている。共に汗を流し苦労した者が去って行くのは、現場に残る者にとってはたまらなく寂しいのだ。

今までの工事で、最後の尻拭いまで手伝ってやったりしてきた安田が去っていったのだ。他の工事屋が一人去る時と同じようには、圭介が受け止めることができないのは当然のことだった。

圭介の不安を裏打ちするかのようなトラブルが安田が帰った直後に起こった。フラッシングの効果を上げるために油量を増そうとして、今まで一台だけ運転していたポンプを二台運転に切り換えて間もなくのことだった。

オイルセラーで叫ぶ川村の声に高瀬と圭介は階段を駆け下りた。駆け込んだ二人のズボンに油が容赦なく飛んできた。タンクの上でビニールホースが踊っている。川村が必死になって押さえようとしているのだが流れの勢いが強くてどうにもならない。ポンプを止めよう。とっさにそう思い、圭介は階段を駆け上がった。

ポンプが止まってもホースはしばらく暴れていた。油溜まりの水位が流れに勢いを与えているからだ。数人掛かりでようやくホースを取り押さえてマンホールに突っ込んだ時には、相当な量の油がオイルセラーの床に流れ出していた。オイルセラーにいた者は皆油まみれになっていた。

床に流れた油を布に吸わせて一斗缶に回収する作業をしている時、高木がやって来た。高木は一目見て事態を察し、圭介に説明を求めた。仕方なしに圭介は床拭きを中断した。説明する圭介の手も上衣もズボンも油まみれだった。

高木は陰しい顔をして怒った。

「昨日、工場長が皆さんを集めて注意をしたでしょう。高価な油なんだから一滴も漏らさぬつもりでやってくれって。一体全体あなた方は真面目に聞いていたんですか。こんなに大量に漏らしてしまって」

「申し訳ありません・・・・・・」

「謝ったら済むくらいに甘く考えているんでしょう。あなた方は・・・・・・」

「いえ決してそんな・・・・・・」

圭介たちは必死だったのだ。そして今も、必死になって床拭きをしている。そんな姿は高木の目にも入っている。頭から足まで油にまみれている川村を高木は見ている。しかし、そんなことは少しも高木の心を動かすものとはならないようだ。高木の頭の中にあるのは工場長の命令だけらしい。

話を早く切り上げて手伝いに行こうとする圭介を高木は引き止めて、くどくどと文句を言い続けた。

「うまいことばかり言っていたけど、安田さんもあまり信用できないな・・・・・・」

「そんな・・・・・・」

圭介は思わず高木をじっと見つめた。圭介と目が合うと高木は落ち着きなく視線をあらぬ方向に泳がせた。「この小心者め・・・・・・」圭介は心の中で怒鳴って高木のもとを離れた。

ビニールホースの固定が不完全だったのがトラブルの原因だった。ホースを太い針金でがんじがらめにマンホールに固定してフラッシングが再開された。今度はホースはビクともしなかった。

再開の連絡に行った時、高木は疑い深い目をして言った。

「本当に大丈夫だろうな、今度は。しかし、念には念を入れてくださいよ。各ホースには見張りを立て、ポンプはすぐに停止できるようにスイッチに一人付けておいてください。今度やらかしたら弁償ものだ」

秋山の耳にも聞こえているに違いなかった。彼は全く顔を上げずに一心に机の上の

書類を読み続けていた。

一時間に一回の割合でハンマリングが行われた。ハンマリングの際には圭介も川村もホースを離れ、高瀬もスイッチを離れてハンマーを握った。一回のハンマリングには約二十分を要した。二十分間ハンマーで配管を打ち続けるのは楽ではない。終り頃には腕を上げるのもおっくうになる。ましてや、夕方のハンマリングは言うに及ばずだ。

フラッシングの二日目は無事に過ぎようとしていた。工事屋たちは油の流れとハンマーを相手に一日の仕事を終えようとしていた。時間係の高瀬がこの日最後のハンマリングの合図を出した。

川村はオイルセラーの奥のほうからやり始める。高瀬はピットに下りてハンマーを振るう。そして圭介はオイルセラー入り口の配管に取り付いた。配管屋たちもオイルセラーに下りて、それぞれの持分の配管を叩き始めた。

工事屋たちは無心にハンマーを振るった。身体は機械のように規則的なリズムで往復運動を繰り返した。一箇所が終わると何かに導かれるように次の所へ移って同じことをやった。配管内の汚れの剥離を促すためにヒーターに蒸気が通されている。油温は五十度を越え、その熱気が配管を通して工事屋たちの身体へも伝わってくる。

しばらく打ち続けているうちに工事屋たちの身体は汗ばみ始めた。鈍った腕で振り上げるハンマーは緩慢な動きをした。息遣いは荒くなり、油の熱で顔が火照った。打ち下ろすハンマーから次第に力が失われ、ハンマーは自重だけで配管の上に落下していった。

カーンカーンというハンマリングの音が中断すると、オイルセラーの騒音地獄も一瞬静かに感じられるようなことがあった。

ハンマーを振り上げ、そして振り下ろすこの作業に必要なのは肉体だけだった。意志の力も頭脳も全く不要だった。往復運動を繰り返す工事屋たちは肉体だけが生きていた。頭脳も精神も死んだように凍りついていた。溶接箇所を一つ一つ拾ってはそこに規定の回数だけの打撃を与える機械。それが工事屋たちの肉体だった。

ハンマリングを終えた直後の工事屋たちは皆疲れ切った表情を漂わせて荒い息をついた。ぼんやりとした顔つきと緩慢な身体の動きは機械の状態に落ち込んだ人間に似つかわしいのかもしれない。

配管屋たちはハンマーを放り出すとすぐ外へ出て一服つけた。そうして彼らは人間を取り戻していった。煙草のけむりは人間精神の糧となって彼らの体内に吸収されて

いくようだった。川村や高瀬、そして圭介も、配管屋たちが一服を終えて戻って来ると、交代を頼んで外へ出て行った。

圭介が裏通りへ出た時、武藤陽子が伝言を持って来た。

「本社の河島さんが電話をください、とのことですよ」

陽子はすぐには立ち去らず、圭介と並んで裏通りを歩いて行った。雑木林の向こうに夕陽が沈むところだった。落ち着かぬ素振りを見せていた陽子が不意に口を開いた。

「わたし、今年一杯で会社を辞めることにしました」

「ほう、結婚するんですか」

陽子は黙って首を横に振った。

既設の設備のオイルセラーの入り口に差し掛かった時、陽子は、職長事務室に用事があるからと言って圭介と別れ、工場の中へと入って行った。別れ際の陽子の言葉が圭介の鈍った心に、戸惑いとも期待ともつかぬ小さな動揺を誘っていた。

「真藤さんがいらっしゃる間に、理由をお話しします」。

裏通りを左に折れると正面に杉の林が見えた。杉の梢は吹き始めた北風にざわざわと揺れ動き、今にも沈もうとしている夕陽を一杯に浴びていた。ほとんど水平に射し込んでくる光はオレンジ色の輝きを杉の梢に与えていたが、圭介の目には妙に白っぽく冷たい光のように映っていた。

オレンジ色の輝きは、鈍った圭介の精神に活性剤を注入しているようだった。それを眺めながら歩いているうちに、不思議な感動が圭介を襲った。突然、圭介の体内から一つの言葉が湧き上がり口を突いて出てきた。

「ああ、おれは今生きている」。

自分の発した言葉に圭介ははっとした。今おれは何と言ったんだ。えっ。生きていたと言ったのか。圭介は立ち止まって自問した。確かに自分は、おれは生きていると言った。どういうことだ、これは一体。

瀕死の重病人が昏睡状態に陥っている。もう何日間も眠り続けだ。一度目覚めてくれたら望みがあると医者と言う。家族の者が見守る中で病人は昏々と眠り続けている。

ある日の夜更け、重病人はとうとう目覚める。しかし、自分が今何処に居るのか解らない。しばらくして自分が病に倒れて病院に担ぎ込まれたことをようやく思い出す。その時、彼の口から思わず言葉が洩れる。

「ああ、おれは未だ生きていたんだ」

そして再び重病人は深い眠りに落ちて行く。

圭介の空想はここまで来て止まった。再び圭介の内部で自問自答が始まった。
—————すると、おれは今瀕死の床で目覚めたというわけか。つい先程までおれは
昏睡状態にあったんだな。おれは何時から眠りに落ちていたのだろう。そのまま眠り
から覚めなかったら、おれは一体どうなっていくのだろう。—————

数十日間にわたるこの現場での熱い秋の日々が、圭介の頭の中にぼんやりと蘇って
きていた。ふと見上げると、杉の梢はもはやオレンジ色の輝きを失い、残照の中に
その面影をわずかに留めているに過ぎなかった。